

システムの概要

- 1、速記する段階では、FDあるいはHDに速記符号をデジタルデータとして記録。
- 2、パソコンにより速記符号を平仮名テキスト・ファイルに変換。
- 3、平仮名テキスト・ファイルをW×Ⅲの再変換機能を用いて未確定状態（キーボードから文字を入力し、変換キーを押した状態）にする。
- 4、文節の切り誤りを正し、同音語を選択し、確定する。
- 5、文章的誤りをVZエディタの編集機能により訂正する。

問題点及び処理方法

- 1、2通りの読みを持つ記号。

例……「きゃ」と「かって」、「しゅ」と「される」。

処理……辞書の読みを書き換える。

処理例……「却下」の読みを「きゃっか」→「かってっか」。

「守衛」の読みを「しゅえい」→「されるえい」。

- 2、長音を表す符号がない。

例……「コーヒー」を「こう」「ひ」「い」と速記。

「シュート」を「しゅう」「と」と速記。

処理……辞書の読みを書き換える。

処理例……「コーヒー」の読みを「こーひー」→「こうひい」。

「シュート」の読みを「しゅーと」→「しゅうと」。

- 3、耳から聞こえる音で速記し、表記を考慮しない。

例……「大阪」を「おう」「さ」「か」と速記。

「遠い」を「とう」「い」と速記。

処理……辞書の読みを書き換える。

処理例……「大阪」の読みを「おおさか」→「おうさか」。

「遠い」の読みを「とおい」→「とうい」。

- 4、片手動詞略語はすべて終止形で速記し、読むときに活用させて読む。

例……「おもう」「ない」と速記して、「思わない」と読む。

「わかる」「ません」と速記して、「分かりません」と読む。

処理……速記符号を平仮名に変換する際に、活用させて出力する。

処理例……「おもう」「ない」と速記して、「おもわない」と出力。

「わかる」「ません」と速記して、「わかりません」と出力。

5、中のむれのキホンを段を替えて代用する。

①「つ」「く」を動詞未然形の「た」「か」に用いる。

例……「待たない」を「ま」「つ」「ない」と速記。

「書かない」を「か」「く」「ない」と速記。

②「つ」「く」を動詞連用形の「ち」「き」に用いる。

例……「書きません」を「か」「く」「ません」と速記。

「落ちました」を「お」「つ」「ました」と速記。

③「つ」「く」を動詞假定形の「て」「け」に用いる。

例……「待てば」を「ま」「つ」「ば」と速記。

「書けば」を「か」「く」「ば」と速記。

処理……速記符号を平仮名に変換する際に、後に続く符号を調べて変化させる。

ただし、副作用がある場合は辞書で個別に処理（「書かない」と「閣内」）。

6、括弧付きの略語は括弧の中を省いて速記し、読むときに前後の関係で補って読む。

①「(し)て」……「((し) て) いる」「((し) て) おる」。

「研究している」は「け」「ん」「きゅう」「いる」と速記し、「知っている」は「し」「つ」「いる」と速記。

②「(の)で」……「((の) で) ある」

「本である」は「ほ」「ん」「ある」と速記し、「読むのである」は「よ」「む」「ある」と速記。

③「の」……「(の) こと」「(の) うえ」「(の) あいだ」「(の) なか」。

「あなたのこと」は「あなた」「こと」と速記。

④「に」……「(に) はいる」「(に) よる」。

「部屋に入る」は「へ」「や」「はいる」と速記。

⑤「す」……「(す) れば」「(す) べく」「(す) べき」。

「研究すれば」は「け」「ん」「きゅう」「れば」と速記。

⑥「(こと)に」……「((こと) に) なる」「((こと) に) なら」

「研究することになる」は「け」「ん」「きゅう」「する」「なる」と速記。

処理……速記符号を平仮名に変換する際に記号で出力する。辞書に、記号を複数の品詞で登録しておくことにより、W X Ⅲが適合する品詞を選択する。

7、「を」の符号がなく、すべて「お」と速記。

処理……速記符号を平仮名に変換する際に、左のむれの「お」は「お」と出力し、右のむれの「お」は「を」と出力する。ただし、左のむれ単独で打たれた「お」は助詞と見て「を」と出力する。

辞書のうち、2音め以降に「お」の読みを持つ単語を書き換える。

登録例……「かお」→「かを」

8、耳から聞こえる音で速記し、表記を考慮しないため、助詞の「へ」を「え」と速記。

処理……「へ」と速記するよう打ち方を変更。

9、助詞の「は」は、通常は中のむれの「は」を打つが、速度を上げるために追い込んで右のむれの「わ」を使うことがある。

例……「僕は」を「ぼ」「く」「わ」と速記。

処理……原則どおり、中のむれの「は」を打つことにする。

10、速度を上げるために似た符号で代用することがある。

例……「最後を飾る」を「さい」「ごう」「か」「ざ」「る」と速記。

11、数詞及び数詞の末尾を省略して速記することがある。

例……「7」を「な」、「月」を「が」と省略して、「7月」を「な」「が」と速記。「千」を「せ」、「百」を「ひゃ」と省略して、「2500」を「に」「せ」「ご」「ひゃ」と速記。

処理……末尾まですべて速記することにする。

12、速記符号は略語が多数あり、助詞に特別の符号を用い、分かち書きをするため、読みやすくなっている。ところが、平仮名のべた書きテキストデータをW X Ⅲに変換させると文節の切り誤りを多発する可能性がある。

処理……記号出力を多くし、文節の切り誤りを避ける。

=====

検討事項

1、文節の切り誤りを減らすために、中のむれの助詞と同音で始まる単語については、左のむれを特殊読みにする。

「は」「の」「も」「に」「が」「で」

2、速記符号の分かち書き入力を利用するために、右のむれが空いた場合には記号を出力し、文節の切り誤りを防ぐ。

3、二重母音（かい、さい、とう etc）を利用して、文節の切り誤りを少なくできないか。

4、数詞を「年」「月」「日」「万」「千」「円」等を含めて辞書に登録。

5、右のむれで「は」「へ」が打てない場合は、助詞「を」と同じように、右のむれの「わ」「え」を打って「は」「へ」と出力することはどうか。

6、句読点を打つ符号を決める。

7、再変換機能の見直し。

8、このシステムに適切なネーミングをする。

活用する片手略語

あわ行五段	思う、もらう、しまう、願う、行う、という、伺う、伴う
か行五段	開く、いただく
さ行五段	申す、渡す、いたす、ほどこす
ば行五段	喜ぶ
ま行五段	望む、頼む
ら変	いらっしゃる、おっしゃる、くださる、
ら行五段	断る、やる、困る、売る、分かる、限る、おる、入る、握る
一段動詞	答える、述べる、できる、決める、やめる、尋ねる、考える、過ぎる、申し上げる、始める、いる、みる
存ずる	存ずる
かもしれ	かもしれない

あわ行五段に接続する符号

	語尾	C略語	キホン及びB略語
①未然形	わ	しく、せる、なく、ねば、しい、なければ、ざる、れる、させ、される、なかった、れて、れた、なければならぬ、ざるをえない	して、す、せ、ぬ、な、ず、ない
②連用形	い	かた、ません、ます、すぎる、ながら、うる、ました、ましょう	まして、ますと、たい
③助動詞「た」「て」	っ	たり、たら	た、て、ちゃ、ては
④片手略語動詞	って	全部	全部
⑤「して」「した」			
⑥否定形			わん
⑦仮定形			
⑧書換名詞形			
⑨書換命令形			
⑩語幹に接続		える、えば	い、え、おう

さ行五段に接続する符号

	語尾	C略語	キホン及びB略語
①未然形	さ	なく、ねば、ざる、なかつた、なければならぬ、なければ	す、ぬ、な、ず、ない
②連用形	し	かた、ません、ます、すぎる、ながら、うる、ましょう、ました、ざるをえない	ました、ますと、たい
③助動詞「た」「て」	し	たり、たら	ては、た、て、ちゃ
④片手略語動詞	して	全部	全部
⑤「した」「して」			
⑥否定形			
⑦假定形			
⑧書換名詞形	し		い
⑨書換命令形	せ		え
⑩語幹に接続		され、せる、させ、せば、	して、し、せ、される

右のむれに来る符号により変化する中のむれ

	C略語	キホン及びB略語
①未然形 つ→た く→か	なく、ねば、なければならぬ、ざる、なかつた、なければ、ざるをえない	
②連用形 つ→ち く→き	かた、ません、ます、すぎる、ながら、うる、ました、ましょう	まして
③音便 つ→っ	おる、いる、する、くる、きり、たり、たる、たら、てき、もらう、られ、みる、いった、した、きた、くださる、たろう、いた、しまう、いらっしやる、やる、いただく、いって、みた、さん、ぱん	ては、して
④假定 つ→て く→け		ば

